

profile

やすかわ・ちかこ●1987年富山県生まれ。大学院工学系研究科都市工学専攻。大学進学時に上京後、東京の“まち”の面白さに気づき、都市開発に関わる仕事へ。新卒で㈱竹中工務店へ入社し、現在は開発計画本部3グループに所属。



社外での打ち合わせに出かけていく機会も多い。

も、少し場所が外れたり、駅が異なるだけで、雰囲気が変わる。丸の内、渋谷、六本木、吉祥寺…様々な顔・イメージの界隈が集まる東京の“まち”。安川は、そういった東京の魅力に惹かれ、大学では都市計画を専攻し、都市デザインやまちづくりの実践について研究を行う研究室を選択した。そして、必ずその場所の社会的な背景や歴史、文化、人の営みを考え、

「最初は思うように進まないことも多いですが

白いこと。東京の“まち”に関することだった。東京というまちは、同じ東京のなかであって、その後進路に工学部を選んだ安川だったが、「工学部へ進んだ理由は、宇宙への興味があつたためです。航空宇宙工学を学ぼうと、上京してきました」という。しかし上京した安川を待っていたのは、宇宙の面白さよりも、もっと面白いこと。東京の“まち”に関することだった。東京というまちは、同じ東京のなかであつた父親が設計を行い、建物がつくられていく現場を間近で見ることとなった。

た例えば「自社で所有するビルがそろそろ建て替える時期なのだが、どのように考えていけばよいだろうか。検討を手伝ってもらえないか」というような相談が寄せられてくる。この段階から、安川たちは関わる。建築主のニーズを掘り下げながら、エリアの特徴・課題やマーケットの分析、ターゲットやコンセプトの設定などを行い、まさに建築主と一緒に一からビジネスをつくりあげていく作業だという。

私にとっての、東京の風景

ひとつの建物をつくる時、その仕事の意味は、ただ建物をつくることだけにとどまらない。そこで暮らす人たちや、まち全体の過去や未来を考えることでもある。今回は、プロジェクト開発を担う安川千歌子さんに、まちをつくることのやりがいや意義を伺った。

勢を学んでいった。「高校生の時に大学見学で東京へ来て、移動中のバスの中からふと見上げたのが、東京ドームシティ内にあるラクーアでした。すごく印象的で、私にとっての『東京の風景』としてずっと心に残っていて。そんな、まちのイメージをつくるような仕事をしてみたいと、就職活動を前にして考えるようになりました」

建築主とともに「からつくる」ビジネス

安川は、プロジェクト開発の担当者として、計画の構想段階から携わる。建築主の社内事業化が決定していない段階から、建築主との対話を重ねて、想いや課題を明確化し、必要に応じて都市計画制度の活用や事業企画の提案を行

輝け! けんせつ小町

プロジェクト開発

安川千歌子

株式会社竹中工務店
開発計画本部 3グループ



「けんせつ小町」は、日建連が定めた建設業で活躍する女性の愛称です。



my Beginning 私が建設業に入った理由

“まち”をつくれる、面白さ



左/東京湾東側の開発にまつわる、イーストベイ・プロジェクト。東京湾周辺の詳細な模型が設置されている。右上/休憩スペースで。社内では部活動が盛んで、この日も所属する軽音楽部について、話に花が咲いていた。右下/所属する開発計画本部での打ち合わせ。プロジェクトの設計図と地図を見ながら、竣工後の未来に思いを馳せる。

my Growing

私が建設業界で学んだこと

自らの意思で人と人をつなぐ



社内にある専門誌がずらりと並ぶ図書スペース。積極的に学んだり調べたりすることができる。

が、お客様との議論を重ね、悩みながら一つひとつ方針を共有したり、課題を解決していきま
す。建物だけでなく、お客様の事業を一緒につ
くっている、という意識を大切にしています」
**多くの人と関わるからこそ
ただの調整役ではない**

建築主と事業計画について練りながら、設計
をはじめとした社内外のプロフェッショナルた
ちと協働し、計画を進めていく。安川の業務は、
社内外の打ち合わせが週にいくつもあり、空い
た時間は調べ物や資料づくりに忙しいようだ。
「社内外の様々なプロフェッショナルの方と
協働しながらプロジェクトを進めていくのは非
常に楽しいです。立場によって様々な意見があ
って、いつも新しい発見や学びがあります。た
だ、立場的について『八方美人』になってしま
いそうなきもありません。でも、ただの調整役で
終わってはいけません。きちんと自分の
意思を持って、何のためにどう動くかを考え、
相手に伝えていかなければなりません」

八方美人になってしまえばと安川自身は
言うものの、上司や先輩から向けられる彼女へ
の視線はそんなこともない。富岡裕一郎グルー
プ長や原田慧グループ主任からも、「コミュニ
ケーション能力が高く、プロジェクトでも、社
内での雑談においても、ムードメーカー」「正面
突破しようとしすぎでは？」と思ってしまうく

らしいフォワード型(笑)。社内では抜きん出
て、本音で人間関係を構築することが上手だと
思います」と高い評価を得ている。

まちづくりを担う仕事

最近、安川が携わったプロジェクトがふたつ
竣工を迎えた。静岡県熱海市の熱海後楽園ホテ
ルの増築と、東京・日比谷の日比谷ジャンテの
改修だ。前者の熱海後楽園ホテルは、約五年前
から建築主と密に議論を重ねて企画を練り、プ
ロジェクトを進めた複合施設。後者の日比谷ジ
ャンテは日比谷のシンボルでもあり、すぐ隣に
新築された東京ミッドタウン日比谷とのつなが
りと、ジャンテらしさの表現の両立を考えなが
らの改修がカギだった。どちらも建築主にとつ
ての事業的な意味合いや、施設の位置づけ、実
際に施設を訪れる人の利用ニーズや利用想定、
アクティビティ等を徹底して考えた。だからこ
そ竣工後にその施設を見に行ったときの感動も
大きいと安川は語る。「実際に見に行くと、皆で
思い描いたように、施設を訪れた方々が楽しん
でくれているのは、とても嬉しいです」

今後は更に事業企画や都市計画の専門性を高
められるよう勉強していきたいという彼女。目
下は、「不動産投資や資金計画に関する知識が
弱点だと思っております」と言いつつ、地
元である富山県でプロジェクトに携わることも
望んでいる。建築主の事業の根幹から関わり、



デスクはフリーアドレス。違う場所で気分をリフレッシュしながら仕事をすることができる。

my style

ゴールデンウィークに北海道でワイナリー巡りをしてきました。生産者の方のこだわり、美味しいワインと食事、ぶどう畑の美しい風景と魅力が満載で、新しい趣味になりそうです。本場イタリアのトスカーナでは、建築・ランドスケープにもこだわった、ワインツーリズムが進んでいるとのこと、是非一度訪れてみたいと思います。



風景の美しい余市のワイナリー

できることの可能性が無限に広がる分、持てる夢もたくさんだ。「特にやってみたいのは、そのまちのランドマーク、あるいはアイコンとなるような場所をつくる仕事ですね。規模の大小に関わらず、まちのイメージを形成し、地域の人にも愛され、人の暮らしを豊かにする「場」を、ハードとソフトの両面からつくりこむことで、実現していきたいです」と意欲を見せる。

建物や施設ひとつでも、事業そのものや、都市そのもの、そして人の生活そのものをつくっていくことにつながっている。これから何十年、もしかしたら何百年、その場所を支え、誰かを喜ばせるものを。安川の仕事は、ずっとずっと続く、まちづくりを担っていく仕事なのだ。

my Growing 私が建設業界で学んだこと